

週日の説教

金 大烈 神父 2009年7月30日(木)

《もう一度機会をいただければ・・・》

大きい手術を受けたことのある人はいますか？ その人たちは、手術を受ける前にどのような気持ちになったでしょうか。

私は、何時間もかかる手術を三回受けました。全部、骨の関係の手術です。体がぶつかるような激しい運動が好きでしたので、運動によって怪我をし、治すために骨ごとに三回くらい手術を受けなければなりませんでした。

最初の手術の時には、麻酔を行うのかなと思ったら、もう手術は終わっていました。何も分からないまま終わりました。何時間かかったか聞いたところ、7時間かかっていた。初めてのときは全然分からないまま過ぎってしまったのですが、二回目は手術の過程がわかっているから、少し緊張しました。そして、三回目の手術は、一番大きい手術だったのですが、入院する時から気持ち悪くなりましたね。この時間は、何をやる時間、この看護師は何のために来たか、全部分かります。そして、手術室に入ったときにも、言葉では言えないくらい気持ち悪くなりました。知らなければそのまま過ぎてしまうのですが、全部わかっているから本当に気持ち悪くなるのです。そして三回目は、麻酔を受ける前に初めて、このようなことが思い浮かびました。「麻酔の間違えで、この場でこのまま全てが終わってしまう可能性もあるのではないかな。そうしたら、どうすればよいか。」と。ものすごく短い瞬間でしたが、悔い改めを含め、いろいろな思いが早く思い巡りました。

その病院がカトリックのものでしたので、手術を受ける人々の為に祈るシスターが手術室にいました。その時、シスターからの話しかけがありました。「神父様、祈りましょうか。」その時、切迫な心で「はい、お願いします。」と答えたのを覚えています。そして、祈ったのは「司祭になってから今まで、司祭らしく生きることが出来たとは思いません。不足な生き方でした。今、あなたが呼んでくださって死ぬことになったら、どうしようもないくらい罪の意識に陥ります。だから、もう一回生かしてください。」という様な内容だったと思います。そして、目が覚めてみたら、手術は済んでいて、結果は成功でした。

私たちの生き方は、このようなものではないかと思えます。ふだんはあまり感じないで生きていて、何か大きな問題にぶつかったときに、今まで間違えていたのではないかな、といろいろなことを考えます。そして、もう一度機会をいただければ、もう一回、一生懸命にやってみよう、と決心します。そして、それが終わって何年も経つと、また忘れてしまうのが私たちの普通の姿ではないでしょうか。

今日の福音(マタイ 13:47-53)も昨日の福音(ヨハネ 11:19-27)も終末のことについてでした。よい者は神様が準備された天の国に住むことができるが、そうでない者は全部追い出される、という話です。このみ言葉を知らない信者はいないと思えます。しかし、普段の生活の中で、この言葉を意識しながら生きる人々は少ないのではないのでしょうか。私たちにとって、自分に与えられた傷みや難しさは、ある意味で少し鈍くなった心を目覚めさせる役割をしているのではないかと思えます。

私たちは洗礼を受けるときに三つの職(務め)をいただきますよね。一つは、司祭職、二つ目は王職、三つ目は預言職です。結局、私たちはみんな司祭の務めをしなければならないし、イエス様が見せてくださった王の正しくて美しい姿をも守らなければならないし、預言者のような役割も果たさなければなりません。預言者の役割とは何でしょうか。過去をきちんと振り返って、未来を予想し、今の時間に住んでいる人々に伝えることです。私たちにとっては、過去と未来を一緒に見ながら今の時間にどうすればよいかを識別する知恵が、何よりも必要なのではないかと思えます。

私たちにどのくらい時間が残っているか分かりません。100年間かもしれないし、ただ、一日だ

けかもしれませんが、いつも過去と未来を見ながら、今の自分の様子を見ると、今よりもっと自分らしい自分をつくる可能性が与えられるのではないかと思います。一生懸命に生きて、よいところと一緒に行きましょう。

ありがとうございました。